RSK山陽放送社長賞

日本一の絶景

津山市立北陵中学校
二年生　清藤丈貴

私は今までたくさんの山に登ってきた。那岐山や大山、日本百名山である石鎚山など。どれも簡単に登れる山ではないが、登頂したときの美しい景色や達成感は今までで一度も期待を裏切ったことはない。私はその登頂したときの嬉しさを求めていろんな山に挑んでいるのだ。いくつもの山に登ってきた私にも、一つだけ登頂できなかった山がある。それは富士山だ。

初めて富士山に登ったのは小学四年生の頃。私はその時、高山病を起こして八合目でリタイアし、初めて登山で悔しい思いをした。それからもう一度富士山に挑戦しようと準備を重ねていたが、コロナや台風などの影響で何年間も挑戦できずにいた。そして今年になってやっと、富士山に登る機会が訪れたのだ。

八月十三日、富士登山の日がとうとう訪れた。私は四年ぶりの富士登山を目の前に、興奮を抑えられずにいた。一緒に登る父の顔をうかがいみると、父も同じように笑顔を隠しきれていなかった。

いよいよ富士登山。最初に踏みこんだ富士山への一歩は重く、今までの悔しさをはらす挑戦の気持ちが強くこもっているように感じた。登山途中で気付いたのだが、登山者の三割ほどを外国人が占めていて驚いた。バングラデシュや中国などアジア圏だけでなく、中にはヨーロッパやアメリカの人もいた。やはり「日本一の山」という言葉に興味を惹かれる登山者は日本以外にもいるのだろう。また、もう一つ気付いたことがある。想像以上に辛いということだ。一歩、一歩と進んで行く度に足に乳酸がたまっていく。三千メートル級の山を甘く見ていたわけではないが、身体の準備が不足していたようだ。そんなことを考えながら登っていると、気が付いたら新七合目とすっかり高いところまで登っていた。

「とりあえずここで休憩しようか。」

父がそう言いベンチに腰を掛けようと後ろを向いた瞬間、私の目に絶景が飛び込んできた。富士宮の街が一望でき、雲の動

きにも迫力がある。だが、他の山よりは美しいと感じないのはなぜだろうか。それは、私が富士山で何も達成していないからだ。何かを達成したからこそ見られる景色と、何も達成せず見る景色じゃ比にならない。だが、登頂するとこれ以上の景色が見られると思うと、俄然やる気がわいてきた。

新七合目からさらに登って約五十分、元祖七合目に到着した。元祖七合目は、今晩宿泊する場所で、少し足が疲れてきたところなのでちょうど良かった。元祖七合目でしっかりと疲れを取り、次の日に備えて仮眠をとった。ときどき外に出て時が流れるにつれて変化する景色に感動しながら初日を終えた。

「そろそろ行こう。」

深夜一時。父の声に起こされた私は、すぐに出発する支度を始めた。気温は十度と低く、万全の対策をして頂上に向けて出発した。一歩ずつ、一歩ずつ、四年前の悔しさをはらすために。一生懸命呼吸を意識し、ゆっくりと暗闇の中を進んでいった。

出発から数十分、やっと八合目が見えてきた時、急に頭が痛くなってきた。

「高山病だ。」

私はそれが高山病だと分かった瞬間、恐怖心を覚えた。一旦八合目で休憩し、必死に呼吸を整えた。もう頂上へは行けないのか、ここで下山するしかないのかと恐ろしくてたまらなく、涙さえこみあげてきた。数十分休憩したところで、父が質問してきた。

「もうやめておく？」

「行ける。」

私は答えた。本当は高山病になったら下山した方が良いのだが、私はもうすでにそう答えてしまっていた。少しずつ上の方の空気に慣れつつ歩みを進めていると、さっきまで暗かった空にも明るさが増してきた。目の前には九合目。九合目にてご来光を見ようと決めた。

九合目には十数人ほどの人がご来光を見ようと待ち構えている。もちろん私もその一人だ。一眼レフを両手に構え、朝日を待っている。

その時だった。遠くの地平線から太陽が顔を出した。それはあたり一面を温かい光で照らした。私はパグのような表情で、手を震わせながらシャッターを切った。こんなにも美しい景色を見て泣かずにいられる人なんているのだろうかと思う。

「まるで天国みたい。」

この景色はきっと一生ものだろう。

山頂はもう目の前。もう一息がんばったら登頂することができる。そう思うと笑顔が浮かび上がってくる。私は早く着きたい一心で足早に登り始めた。途中、曇ってきたこともあったが、そんなことは関係ない。私はただ山頂をめがけて登るだけなのだから。そう思えるほど登頂したい気持ちは強かった。あと一息、あと一歩。私の右足は山頂という領域に踏み込んでいた。

「よしっ、やった。着いた。」

私はその場で飛び跳ねた。中学生にもなってはしゃぎまわるなんてみっともないかもしれないが、その時はもう仕方がないと思った。なぜなら、あの富士山を登頂したのだから。今まで受けた周りの人からの恵みとか一生懸命努力してきた分の達成感がそこにはあった。その時は曇りで、頂上からの景色は見えなかった。だが、この喜びが感じられた以上、そんなものは見えなくたっていい。景色が目で見えなくとも、私の心の中は絶景だ。

この絶景を私一人で手に入れることができたわけではない。富士山に向けて一緒に準備してくれた母。私の命を何よりも心配してアドバイスしてくれた姉。そして私を頂上まで導いてくれた父。色々な人に助けてもらったから、ここまで来ることができたのだ。

私は絶景を見に山を登るのではない。絶景を感じるために山に登るのだ。山に登れるのは私一人の力ではない。周りからの恩恵があってこそ登れるのだ。富士登山を通してそんなことを学んだ。

私はこの経験を決して忘れることはないだろう。

「日本一の山には日本一の絶景がある。」